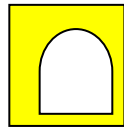


日吉台地下壕保存の会会報



第160号

日吉台地下壕保存の会

不戦こそ慰霊

会長 阿久澤 武史

『平家物語』の「能登殿最期」は、高校の古典の定番の教材です。栄華をきわめた平家は、清盛の死とともに凋落の一途をたどり、源平の合戦は壇ノ浦で最後の局面を迎えます。幼い安徳天皇は入水し、一門の人々も次々に海に身を投げる中で、能登殿（平教経）は色鮮やかな鎧兜に身を包み、必死の形相で敵の大將・義経に迫ります。奮闘むなしく、源氏の武者を道連れにして海中深く沈みました。平家の将・知盛の最期の言葉が印象的です。「見るべきほどのことは見つ。いまは自害せむ。」、一族の繁栄と滅亡をすべて見届け、もはや思い残すことは何もないということでしょう。

有名なこの一段を教室で読む時、私は何とも言えぬ居心地の悪さを感じてきました。例えばここに「滅びの美学」のような説明語句を重ねてしまうと、途端にある種の「危うさ」が生まれるからです。もののふ（武士）の「勇ましさ」や「潔さ」といった面が不用意に美化され、学校教育の中でひとり歩きしてしまうことへの不安と言い換えてもいいのかもしれません。

『平家物語』は盲目の琵琶法師によって語られました。琵琶の音とともに語られる物語世界の中で、平家の若き公達（きんぎょたち）が非業の死を遂げ、多くの武者たちの命がはかなく消えていきます。能楽師の安田登氏は、『平家物語』を死者の鎮魂の書として読み解きます（『100分de名著・平家物語』NHK出版）。能楽には『平家物語』を素材にした「修羅物」と呼ばれる演目が多くあります。そこでは無念の死を遂げた武将が亡霊となって、現代の私たちの前に立ち現れます。平家一門の物語を聴く者、観る者の心の中には、常に人間の「死」というものに対する「おそれ」（恐れ／畏れ）がありました。それは「勇ましさ」や「潔さ」とはおおよそ異なるものだと思います。

昨年、当会の会員（運営委員）である遠藤美幸さんが、『戦友会狂騒曲』を上梓されました。戦友会の「お世話係」としての体験をおまとめになったものですが、体験記の領域をはるかに超えて、戦争体験者が抱えた心の闇や戦没者の慰霊という重い問題に正面から向き合っています。戦友会に集う人たちは大きく二つに分かれます。「死」に対するおそれを知っている人たちと、それを知らない人たちです。過酷な戦場を体験し、心の中に消えない傷を抱えている人たちは、たとえそれを語らなくても「死」のおそれを知っています。一方で、それを知らない人たちは、借り物の勇ましい言葉で戦争を語り、自分ではない他人の体験を美化しようとしします。

【目次】

巻頭言【1-2p】 不戦こそ慰霊 会長 阿久澤武史

書籍紹介【2-3p】『戦友会狂騒曲（ラプソディ）』

著者・運営委員 遠藤美幸

お知らせ【3p】 2025年度(第18期)ガイド養成講座のご案内

ガイド学習会再録【4-5p】 谷口吉郎の建築について(1)

運営委員 佐藤宗達

書籍紹介【5-7p】

◇『カミカゼの幽霊 人間爆弾を作った父』

運営委員 岡本雅之

◇『大佛次郎 敗戦日誌』より

運営委員 佐藤宗達

連載【8-11p】

◇海外戦跡めぐり(27) フィリピン戦争遺跡(1) 運営委員 小山信雄

◇日吉海軍・設備アレコレ(40) 地下壕内の結露と地下水の違い

運営委員 山田 譲

聞き取り【12-15p】 東京大空襲・日吉地下壕体験者

河崎三千夫さんのお話 文責 山田 譲

活動の記録【16p】 2024年10月-2025年1月

この本の末尾に記された、105歳のビルマ戦士の言葉が強く響きます。

「不戦こそ、最高の慰霊です。」

担架兵としてビルマの過酷な戦場を体験し、何人もの戦友の最期を見届け、自身も死の淵をさまよい、生き残った人の言葉です。実際の戦場で「見るべきほどのことは見つ。いまは自害せむ。」という心境で自死を選んだ兵士がいったいどれほどいたでしょう。ひとりの人間として当たり前に望むことが叶えられず、無念の思いで命を落とした若者が大半だったはず。そうした人たちの魂をどのように鎮めるのか、戦没者の慰霊の問題は、いまもなおこの国が抱える大きな課題です。

新しい年を迎えました。今年は戦後80年です。世界では終わりの見えない戦争が続く、戦禍は広がる一方です。去年は日本の政局に変化があり、アメリカでは大統領選挙がありました。この国や世界がこれからどうなっていくのか、予測が難しい時代になっています。異常気象や自然災害も心配です。こうした中で、人々の分断を引き起こす強い言葉や、耳を覆いたくなる中傷の言葉、戦争を肯定する言葉、日常生活の不安を助長する言葉があふれています。インターネットやSNSで真実とは思えない情報が飛び交う中で、事実を冷静に見極める力が必要になります。

琵琶法師が語る時代は、不思議なほど現代と重なっています。大火で町が燃え、大地震や辻風（竜巻）に見舞われ、長引く戦乱で人々は行き場を失いました。『平家物語』を鎮魂の書ととらえ、授業で「慰霊」について話すとき、生徒たちは身近な人の死や、震災・水害といった実際に起こった出来事とつなげて理解しようとしています。人の死を悼む気持ちは人類共通のものです。慰霊は死のおそれと同義であり、不戦の思想につながります。そこにある深い意味を、あらためて見つめ直さなければならないと思っています。

書籍紹介

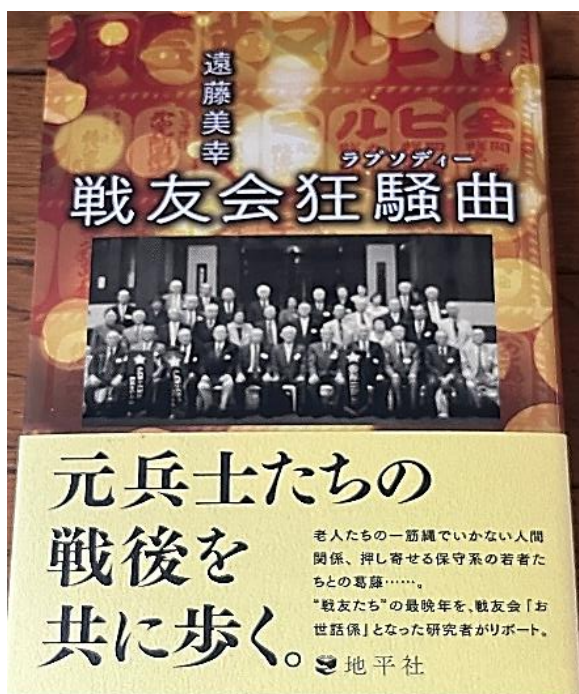
『戦友会狂騒曲（ラブソディー）』（地平社、2024年） ～不戦こそ慰霊～ 著者・運営委員 遠藤美幸

戦友会とは、戦争でともに戦った元兵士らとその体験を語り合い、戦没者の慰霊や会員（戦友）と遺族の親睦を図る場です。そのような戦友会に遺族などの関係者でもない筆者が、なぜかガダルカナル戦やビルマ戦などの戦場を経験し、「強兵」として知られた東北・第2師団の戦友会の「お世話係」を約20年近く担うことになりま

す。戦友会に集う老人たちは、そこで何を語りどのような思いで戦後を生きてきたのでしょうか。

外からは見えにくい戦友会。戦争を懐かしむ懐古主義的で保守的な老人たちの集まりのように思う人もいるかもしれませんが、実は、戦友会に集う元兵士らの思いはとても複雑で入り組んでいます。

戦友会では戦時中の軍隊の階級がものを言い、指揮官が真ん中の席に座って、階級順に席が決まっています。戦後、事業に成功して財をなした社長であっても、軍隊では下級兵士の二等兵であれば戦友会ではそのような立ち位置になることも珍しくありません。私のような部外者の「お世話係」は末席にひっそりと座ります。そして、戦友会で語られる「武勇伝」に居合わせた元兵士たちの間でも複雑な思いが渦巻いています。



ある時、彼らの苛烈な戦場体験や複雑な思いを持つ元将兵らを脇に、「聖戦を戦った英雄」と持ち上げる保守系の若者たちが次から次へと押し寄せてきます。若者たちは口を揃えて戦後の歴史教育を批判し、「侵略戦争ではない、植民地解放戦争だ」と主張しました。彼(女)らはこのように言えば元兵士らがみな喜ぶと思っています。

ところが戦友会のおじいさんたちは意外な言動をとります。今となっては戦場を体験した元兵士らによる戦友会はありません。当事者の話を聴くことができなくなりました。戦場から戻った元兵士らは何を思って戦後を生きてきたのか、この本につぶさに書いてあります。

「毎年どんな立派な慰霊祭をやっても戦没戦友は喜ばない、慰霊祭より不戦しかない」とビルマ戦を生き抜いた元兵士がしみじみと語りました。これは戦没兵士の「声」でもあることを忘れてはいけないと思います。

お知らせ

2025年度(第18期)ガイド養成講座のご案内 ～戦争遺跡を案内する平和の語り部になろう～

慶應大学日吉キャンパスの地下に広がる戦争遺跡・日吉台海軍地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。過去の戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨で無謀な戦争をくりかえさないために活用していくには、ガイド活動が不可欠です。

物言わぬ遺跡をガイドし多くの方に見学してもらい、日本の戦争の過去を今に語り伝えましょう。この活動をいっしょにやってみませんか？

第1回 4月12日(土) 13時～15時半 慶應大学来往舎・中会議室

《私たちのガイド活動》保存の会の歩み・活動 見学会の進め方

☆定例見学会 4月26日(土)、13時日吉駅前にガイド・受講者集合

※毎月行っている定例見学会に、実習として都合のいい日に参加。

第2回 5月10日(土) フィールドワーク 10時～15時 東横線日吉駅前に集合

《キャンパス外周から見る海軍地下壕群》日吉台の外周めぐり、地下壕出入口など

☆定例見学会 5月14日(水) 5月24日(土) 6月11日(水) 13時日吉駅前に集合

第3回 6月14日(土) 13時～15時半 来往舎・中会議室

《戦争体験者のお話と日吉の地下壕の概要》

東京大空襲体験者・二瓶治代さんのお話 パワポ映像での地下壕説明

☆定例見学会 6月21日(土) 7月9日(水) 13時日吉駅前に集合

第4回 7月12日(土) 13時～15時半 来往舎・中会議室

《まとめ》「ガイドの手引き」説明と、案内ガイドを実際にやるための習熟手順説明

私たちの目指すもの―「語り継ぐ」ということ、フリーディスカッション、修了証授与

参加費 3000円(全4回分 冊子2冊、資料集3冊代を含む)

申込先 メールまたは電話で、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号を、下記

「ガイド養成講座」係へお申し込みください。問い合わせも下記へ。

メール hiyoshidaichikagou@gmail.com TEL 080-5612-6344 (ガイド養成講座係 佐藤) ― 留守番電話になっていましたら後ほど折り返しお電話いたします。

講座定員 20人で締切り ※会場は慶應大学日吉キャンパス入口のイチョウ並木の先、左側の来往舎2階です。 ―主催 日吉台地下壕保存の会―

ガイド学習会再録

「谷口吉郎の建築について(1)」 運営委員 佐藤宗達
(2024. 11. 4 於日吉地区センター中集会室)

① 谷口吉生「私の履歴書」日本経済新聞 2017年6月連載、関連部分のみ抜粋

連載①略「若い建築家の父は外務省嘱託として日本大使館庭設計のため、1938年秋にベルリンに渡った。翌年8月27日、戦争の危機が迫る中で帰国を決意し、小さなボストンバック一つを携えドイツを後にする。ハンブルグ港を出港した靖国丸を追いかけて、陸路でノルウェーのベルゲンへ。停泊中の船に乗り込んだ翌日の9月1日、ドイツによるポーランド侵攻を知る。200人を超す同胞とともにベルゲンを発ったのは3日後のことだ。」略「1937年10月17日、東京で生まれた私は「3代目」の建築家である。母方の祖父は東京駅の設計に参画した松井清足。父は東宮御所や東京国立博物館東洋館などを手掛けた谷口吉郎。東京帝国大学（現・東京大学）を卒業し、新進の建築家として活躍するかたわら東京工業大学で教鞭をとる父に対しては、とてもかなわないという思いから、私は建築家以外の道に進もうと考えていた。ところがその後、建築の道に進み、独立してからすでに40年余りになる。」

連載③略「60年代に「博物館明治村」の創設に奔走した父にとって、伝統的な建築の保存は使命とさえいえるものだった。戦災を逃れた建築物が開発の波にのまれ壊されていくのに胸を痛めた父は、金沢の旧制第四高等学校時代の同級で名古屋鉄道社長の土川元夫氏と、こうした建築のための“博物館”構想を立ち上げる。1965年、用地と資金を提供した同社の協力を得て「明治村」を実現させ、自ら館長に就いた。」略「父は記念碑の類いを数多く設計した。文学碑の第一号とされる徳田秋声文学碑に始まり、永井荷風文学碑、室生犀星文学碑、吉川英治墓所、志賀直哉赤城文学碑、国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑の碑一。気に掛けていた沖縄県糸満市の「沖縄戦没者慰霊碑」の完成を見届けるように、1979年2月2日、父が他界した。」

連載⑨「東京の天現寺にある「慶應義塾幼稚舎本館」の建築は1937年、私と同じ年に生まれた。今年、ちょうど80歳。この現代的な校舎が戦前にできたと聞いて驚く人は多い。設計者は30代の若き建築家だった私の父、吉郎。幼稚舎理事の楨智雄氏（建築家・楨文彦氏の伯父）は父に設計を依頼し「塾の建築に魂を入れてほしい」と話されたそうだ。父は、教室の日当たりをよくするため、南面は床から天井までの窓で開放し、フロアヒーティングも導入、教室のテラスから直接校庭に避難できる階段を設置するなど、生徒の安全、健康、衛生に配慮した鉄筋コンクリート校舎の先駆だった。その後、父は慶應義塾の多くの施設設計に携わった。大半は戦後のキャンパス復興に関するもので、解体された建築も多い。幼稚舎の翌年に完成した「大学予科日吉寄宿舎」は異なる設計者によって改修されて現存。代表作品の「新萬来舎」は部分だけを移築、「学生ホール」は猪熊弦一郎氏による壁画だけを移して建築は解体されている。

② 谷口吉郎著『せせらぎ日記』（中公文庫版）「グルンドヴィヒ記念教会堂」

「立ったまま、工事中の床を眺めると、床下は空洞になって、二重の構造になっている。それを見て、パネル・ヒーティングと称される「床暖房」であることがわかった。この暖房法であるなら、私は日本で東京の渋谷に近い天現寺に、慶應義塾の「幼稚舎」を設計した時に、この床暖房の方法を新しく試みてみた。スイスのアルプス地方で結核治療所に、パネル・ヒーティングが用いられていることを書物で知り、それを研究して、日本の気候や技術に適合するようにして、新しく建つ小学校の床にそれを実験的に実施したのであった。床の下に鉄のパイプを配管し、それに温水を循環させる方法だったが、実施してみると暖房効果がよく、経費も経済的であったので、父兄や先生がたにも喜ばれた。その幼稚舎の校舎が落成したのが、一昨年昭和十二年

であり、続いて、神奈川県の日吉の「慶応義塾寄宿舍」にも、私の研究した床暖房を実施した。それが昨年である。」

注1. 寄宿舍の建造年は1937年。

注2. 谷口吉生氏は2024.12.16死去されました。

注3. 次号に、③『国際建築』より「慶応義塾寄宿舍」 ④寄宿舍図版 ⑤谷口吉郎「谷口吉郎の建築について(2)」を掲載予定。

書籍紹介

『カミカゼの幽霊 人間爆弾を作った父』 神立尚紀著

小学館 2023年7月5日発行

運営委員 岡本雅之

この本は海軍特攻兵器、人間爆弾「桜花」の発案者「大田正一」の生涯を概説している。まず海軍の特攻兵器開発の経緯について簡単に触れます。

昭和18年(1943)7月、新たに軍令部第二部長に黒島亀人大佐が着任。同年末、黒木中尉、仁科少尉が「人間魚雷」の図面を提出。しかしこの時は軍務局一課長及び軍令部永野総長ともに却下。しかし翌19年(1944)マーシャル諸島陥落、2月のトラック諸島が大空襲を受けるなど戦況の悪化に伴い、19年(1944)2月26日、試作を実行(ただし命中直前に脱出装置をつけることが条件)。この脱出装置については有害無益との黒木・仁科の反対で実現しなかった。

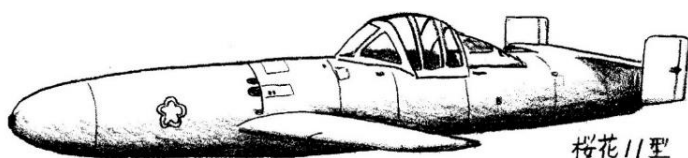
一方、同年4月4日、黒島第二部長は作戦担当の軍令部第一部長に7種類の特攻兵器の試案を提示。「体当たり戦闘機」「装甲爆破艇」「大威力魚雷」など。同年5月、人間爆弾の構想あり。輸送機部隊の大田正一特務少尉が「大型爆弾に翼をつけ人間が操縦して敵艦に体当たりをする」考えを具申。→「桜花」

海軍の特攻兵器は爆装航空機による航空特攻の他、人間魚雷「回天」、「震洋」(モーターボートに250キロの炸薬を積んで艦艇に体当たりする)、また潜水服を着用し海岸線に展開し敵の上陸用舟艇を竹竿に着装した機雷で破壊する「伏龍」(実戦には使われなかった)がある。

『カミカゼの幽霊』によると桜花の発案者である「大田正一」特務少尉が戦後も生存し82歳まで生きたとの事。私にはびっくり仰天である。「桜花」は一式陸上攻撃機につりさげられて戦闘空域まで運ばれ、操縦員が母機から桜花へ乗り移り、滑空しながら敵艦を目指しロケット(9秒間)を活用し敵艦に突入する人間爆弾である。全体で約850機つくられたが、桜花を輸送中の艦が潜水艦に撃沈されるケースも多かったようだ。1945年3月21日から6月22日まで全10回の攻撃で84機の一式陸上攻撃機の出撃、未帰還51機。ほとんど戦果はなかったようである。明確な戦果は終戦までに駆逐艦他3隻にとどまっている。米軍の記録によると、1945年4月12日、哨戒駆逐艦「マナート・L・アベール」、5月4日、敷設艦「シーア」、5月11日、駆逐艦「ヒュー・W・ハドレイ」が撃沈あるいは大破とのこと。

発案者である大田正一については、「終戦3日後、遺書を残し、零式練習戦闘機で「神之池基地」を飛び立ちそのまま行方不明となり殉職した、というのが定説であった。ところが大田正一は生きていた。この本によると82歳まで生きたとのこと。(佐藤宗達さんに紹介されて手に取った)。

「大田正一」生存説は一部の旧海軍関係者の間では戦後早くからささやかれていたそうである。彼は横山道雄という名前で大阪、東淀川区に住み家庭をもっていた。そして1994年12月7日



82年の生涯を閉じるまで秘密を抱えひっそりと生きた。彼の一人息子、横山隆司は中学3年生のある日、母からこれがお父さんの本当の名前と言って「海軍特務少尉 大田正一」と聞かされる。その時、父は時々買って読んでいた軍事雑誌『丸』を出してきて「人間爆弾・桜花」の記事を示し、そこに書かれた「大田正一特務少尉」の名をさし「これがわしなんや」と明かしたという。彼はそれまで戸籍のない人生を送ってきていた。高齢になり病気がちの生活となったが、戸籍がないため健康保険に入らず、高額な医療費の請求に、隆司は戸籍を回復し住民票をつくり国民健康保険に加入出来ないかと考え厚生省援護局に戸籍回復の申請を出した。厚生省からの回答は「大田正一 大正元年8月23日生 山口県熊毛郡室津村668番地 昭和23年8月19日死亡届」。本稿とは関係ないがこの熊毛郡室津村は私の本籍、熊毛郡平生町の隣村である。

2014年春、講談社を通じて「大田正一の遺族」を名乗る人から連絡があり話したいことがあるという。この人は大田正一の長男・隆司の妻で大家美千代と名のつた。彼女によると大田正一は戦後49年たった1994年12月まで存命であったという。ここから著者神立尚紀氏の大田正一の長男夫妻への取材が始まる。

戦争が終わって7年後に生まれた長男隆司の記憶に残る父は「大田正一」ではなく「横山道雄」だった。隆司は高校生のころから戦争関連の本を読みあさるようになり、戦闘機や軍艦はカッコいいものとして憧れを抱いてきた。「でも、父が桜花を発案したと知ってからは別の感情を覚えるようになってきました。父が爆弾に人を乗せて体当たりさせるなんて恐ろしいことをほんとうに考えついたのだとすればその人間性を疑うというか…。」

隆司は1994年12月7日、父が亡くなった後転職し、電気主任技術者の資格を取り、独立し電気まわりの工事を主にやっているという。父、大田正一については「思い出を話そうとしてもなかなか考えがまとまらない、言葉が見つからない。桜花で戦死された方々のご遺族の心情を想像すると、そんな兵器を考え出した父が戦後も生き延びたことについて、批判されても仕方がないと思いますし、申しわけないという気持ちもありますし…。」

大田正一については大正・昭和・平成と82年にもわたって生きたにもかかわらずその生きた証はほぼ見当たらない。「なぜお父さんはこれほどまでに自らの痕跡を消そうとしたのでしょうか？」という著者の質問に、父が亡くなる3ヶ月前にポツリといった言葉を答えてくれた。「いまさらわしがほんとうのことは言えんのか。国の上の方で困るやつがおるからな…。」と。終戦後、桜花搭乗員からはこんなものをつくったということで、最低の人間、といわれ嫌われていたとのこと。

1944年7月、海軍航空技術廠長和田操中将・山名正夫技術中佐・三木忠直技術少佐が「第1081海軍航空隊」海軍少尉大田正一と面談。大田が鉛筆書きの図面を示す。一式陸攻につるされたグライダー爆弾が描かれ、それを見た三木少佐は「それで誘導装置は？」と聞いた。「人間を乗せます」と大田は答えた。体あたりというがいったい誰を乗せていくつもりだとの重ねての質問に「私が乗って行きます、私が」と。結局、大田の案は採用され、発案者の大田正一の頭文字をとって（マルダイ）と名付けられた。「人間が操縦するグライダー爆弾・桜花」の誕生である。「桜花」の開発経緯、戦闘経緯の詳細はふれないが数冊の書籍があるので興味のある方は参照して下さい。

参考

『桜花特攻隊 知られざる人間爆弾の悲劇』 木俣滋郎 光人社NF文庫

2001年8月13日発行

『桜花 非情の特攻兵器』 内藤初穂 文藝春秋社 1982年3月25日発行

『カミカゼの幽霊 人間爆弾をつくった父』 神立尚紀 小学館 2023年7月5日発行

終戦3日後に神之池基地（茨城県鹿嶋市）を飛び立ち海上に着水したのち漁船に救助され、約一年間は鹿嶋市で暮らしその後東京に転居し、1950年に大阪に出た。大阪

で衣料のブローカー、繊維新聞の社員等、ここで大屋義子と出会い結婚、1954年長男隆司が誕生。1959年、東淀川区に転居、ここで生涯を終わることとなる。

晩年大田正一は高野山の宿坊・高室院を尋ねる。1994年5月、対応した僧侶・宮島基行との会話で太平洋戦争の話になり、トラック島の空襲の話から特攻隊の話、桜花の話となり、彼は桜花について「ほとんどが敵艦にとりつく前に墜とされて、多くの若い人を犠牲にしてしまったのは残念だったし申し訳なかった。本当はもっと戦果を挙げられるはずだった。準備も作戦も杜撰だった。いまもって納得がいかない。慙愧に堪えない…」というような事を語った。そして「じつは私が大田正一です」と。

その後、白浜に向かい、四時間のバスの旅を終え三段壁につく。ここは高さ60mの断崖絶壁が2キロのわたって続いていて、年間10数件の投身自殺があるという。ここで大田は投身自殺を図るが脚力が衰えており柵を乗り越えられなかったようだ。この自殺騒ぎから三週間後大田は息子夫婦に伴われ再び高野山を訪れ、宮島基行にお世話になったお礼を言った。二度目の高野山訪問のあと太田は末期の前立腺がんで余命3ヶ月と宣告された。余命宣告から約半年を生きなおも多くの秘密を抱えたまま1994年12月7日、82年の生涯を閉じた。以上、『カミカゼの幽霊』を概説した。ご興味のある方はぜひご一読ください。いつでもお貸しします。

書籍紹介

『大佛次郎 敗戦日記』より

運営委員 佐藤宗達

大佛次郎は日本の敗戦を自らの手で記録しようとするかのように、昭和十九年の九月から突如日記を付けはじめた。この日記は翌年の十月十日まで続き、役目を終えたかのようにここで終わっている。この日記には、敗戦に向かう日本の様相が重層的に描かれており、歴史の貴重な証言となっている。神風特別攻撃隊にも触れているので引用する。

昭和十九年十月二十八日「略 夕方のラジオで神風特別攻撃隊の発表あり。V1号に乗って行った青年たちらしい。(十九才より二十四才の若もの也。)海ゆかばを聴いて深く心を動かされる。若い人々だから一途に夢中に成り得るしまたそうなる雰囲気にいるのである。しかしこう云う人たちに依って日本の歴史が作られて行くと云うことである。ひとの心をひき締める不思議さである。言葉では云い現し得ぬ。この事実の方が強く鋭く、難有さと云うものさえ平然と蹴放し去っているのである。事実若しくは行動の世紀と云うのを慣用の意味より深く感じさせる。慣用の意味では統一を欠いた事実各個の氾濫なのだが、ここでは整然と貫かれ、なお後続せられる一つの強い意志が在るのである。現に軀が利くものならば自分が乗って行きたいような感情が自分の胸に動くのを感じたのではないか。略」十月二十九日「略 村上君が来て関大尉(昨夜発表の攻撃隊の)妻女が名越にいと話す。

略 木原君が関大尉の奥さん家を訪ねると寿福寺が来て読経中、経なかばにして外からメジロが飛び込んで来て床の間の壁に突当って墜ちて死ぬ(訂正 硝子戸にあたり嘴を折りし也)坊さんは改めてメジロの為に経を読む。関大尉が体当たりによって身もともに碎けて遺骨も還らぬ人だけに小説の如き話なり。奥さんは鎌女出二十三才、この三月結婚。名越の奥なので山に小鳥が多い。二十四才の大尉は帰って来るとオハジキなどして遊び小鳥の多いのを悦んでこれはおれの友達だからと称していたと云う。小説に書いたら真実感を失くしそくない話である。世界はこう云う単純な若い人たちに依ってメルヘンに近く成って来ているのかも知れぬ。略」十一月四日「略 関大尉の家では若い同期生がかわるがわる弔問に来て、玄関でこの度はお目出とう御座いますと挨拶する。夫人の父親がまるでお正月が来たようだと笑って話したと吉野さんの話。これは明るいものである。略」

出典 大佛次郎著『大佛次郎 敗戦日記』草思社刊

連載

海外戦跡めぐり(27) フィリピンの戦争遺跡(1)

最初の特攻隊航空基地マバラカット

運営委員 小山信雄

昨年秋、「フィリピン戦跡ツアー」に参加し、初めての航空特攻機が飛び立った地を訪れました。マニラ北西約 60 km に位置する現米空軍基地にはかつて日本帝国海軍基地が存在し、多くあった飛行場の一つ「マバラカット飛行場」から、昭和 19 年(1944) 10 月 21 日、初の特攻機(神風特攻隊)が飛び立ちました。航空特攻はこの日を皮切りに終戦の日まで毎月おこなわれた訳ですが、敗戦が濃くなるにつれ援護機のない特攻となりました。「援護機のない特攻隊のパイロットが自ら特攻直前の最期の確認モース信号(・・・-----)を発信していた」と私たちは地下壕の通信室でガイドをしておりますが、特攻初期の事情は大きく異なっておりました。

最初に飛び立った関行男大尉を特攻隊長とする「敷島隊」(ゼロ戦爆装機 5 機)には、「最強撃墜王、ラバウルの魔王」と呼ばれたエースパイロットの西澤廣義飛曹長(1920.1~1944.10.26)他の直掩機(全 4 機)がついていました。「敵艦発見出来ず帰還、その後連日出撃するも悪天候等で帰還」を繰り返し、最終的に「栗田艦隊のレイテ湾突入に呼応」の特攻出撃命令により、10 月 25 日出撃し、レイテ湾に進出する護衛空母 5 隻を基幹とする米機動部隊に全機突撃。「空母 1 撃沈、空母 1 大火災、巡洋艦 1 撃沈」と西澤飛曹長より大西瀧治郎中将(神風特攻隊生みの親)に報告されています。初の成果を挙げた 10 月 25 日を「記念日」と制定、毎年顕彰行事開催も決定。関家(愛媛県西条市)の前には「軍神関行男海軍大尉之家」という案内板が立てられ、多くの弔問客が訪れ「軍神の母」と称賛された母サカエさんは対応に追われていました。

しかしながら敗戦が決定的になると世の中の風は一変。「戦争加担者」として罵詈雑言を浴びたり、関大尉まで「戦争犯罪者」呼ばわりされるに至りました。サカエさんは遺族年金も日本海軍解隊と共に廃止され、生活に困窮することになりましたが、最終的には石鎚中学校(愛媛県西条市)の用務員の職を得、1953 年 1 月に 55 歳で亡くなりました。

最初の内は「今の戦況を救えるのは、若い君たちのような純真で気力に満ちたひとたちである・・・」等の訓示があり「軍神」と賛美され、「女々しい言葉などもってのほか!」と真実の記事は書き直されましたが、戦局が変われば誹謗中傷の数々。戦後から現在に至っては当の本人達の気持ちはお構いなしに、英雄視されたり犠牲者と呼ばれたり。本当に耳を傾けるべきは彼らの心情のはず。大きな重圧の中、残さざるを得なかったご本人達の言葉の中にこそ真実が隠されているのだと思います。関大尉は出撃前に彼の親しい報道班員にだけ、以下のように本音を吐露しています



マバラカット西飛行場



マバラカット東飛行場

「日本もおしまいだよ。僕のような優秀なパイロットを殺すなんて。僕なら体当たりせずとも敵空母の飛行甲板に 500 kg爆弾を命中させる自信がある。日本帝国のためとかではなく、最愛の妻の為にゆくんだ。命令とあらば止むをえまい・・・」

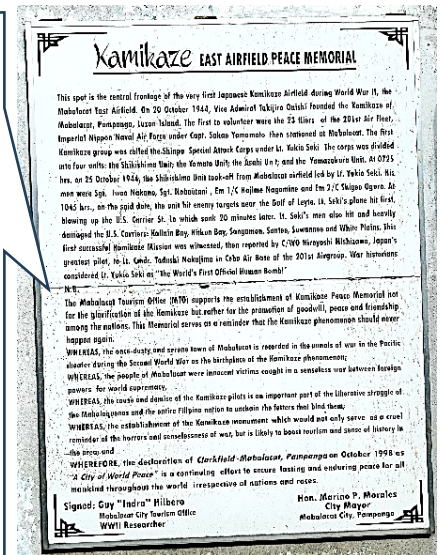
Kamikaze East Airfield Peace Memorial

前半：特攻についての詳細（略）

後半：マバラカット観光局が神風平和記念碑の建立を推進した理由

神風特別攻撃隊（called The Shinpu Special Attack Corps under Lt. Yukio Seki）の栄光を賞賛するのではなく、その歴史的事実を通じて世界の民族に平和と友好の尊さを訴えるのである。神風平和記念廟が神風特別攻撃隊のような不幸な出来事を二度と繰り返さないと誓う場所となることを祈念する。

マバラカット観光局長 ガイ インドラ ヒルベロ
マバラカット市長 マリノ モラレス



レイテ島に上陸進める米軍を阻止するため、最後の闘いを総力挙げて4つの比島の戦場（シブヤン海、スリガオ海峡、サマール沖、エンガノ岬沖）で戦った連合艦隊だったが、制海権も制空権も戦闘能力ほぼ喪失することに。この時期に一矢報いるように関大尉率いる敷島隊は特攻に成功。



連載

日吉海軍・設備アレコレ【40】地下壕内の結露と地下水の違い
運営委員 山田譲

夏になると地下壕の天井や壁に水滴がついてキラキラしています。床も濡れています。しかし冬になると天井も壁も床も乾いています。他方、1年中壁から地下水が滲み出して側溝に流れ込んでいます。どちらも水ですが、出所が違うのでお話ししておきます。

① 結露

天井や壁に付いている水滴は、空気中の水分（水蒸気）が空気の温度より冷たいコンクリートに触れて水（液体）になった結露です。これは冷たい水のコップの外側に水滴がついて濡れるのと同じことです。地下壕の中の空気は外気が入って来ます。夏は暖かく冬は冷たい空気です。他方、地下30mの土や岩の温度は地表の寒暖が伝わりにくいので年間を通して16～18℃くらいです。

したがって夏の暖かい湿った空気の水蒸気（湿気）は、地下壕のコンクリートによって冷やされて水滴になります。床にも結露しますが、天井の結露した水滴も落ちてきます。それで水たまりができるほどです。逆に冬の冷たい乾燥した空気は、壁の温度で暖められるので結露しません。それで冬の地下壕の中は乾燥しています。床の土がホコリになって舞い上がるほどです。

② 地下水

地下水は1年中、壁から滲み出しています。場所によりますが、かなりの水量になります。これが排水溝を通過して壕外の民有地の庭の方に流れ出しています。地面の下には必ず地下水脈があります。粘土層の上に砂礫層があると、そこを地下水がゆっくりと流れていきます。その地下水脈を横切る形で地下壕を掘っているところは、コンクリートの壁に地下水が滲み出してきます。この水は地表に降った雨水が滲み込んだものです。

しかし雨が降ってから地下30mに達するまでは、相当な時間がかかります。ですので地上で大雨が降っても地下水の水量に変化はありません。雨が少ない冬の季節になると水量が少し減ったかなという程度です。たぶん地表の雨水が地下壕に達するまで1か月以上かかるのではないかと思います。私の近所の崖下の湧水（「清水の茶屋跡」という名所旧跡です）は雨が少ない冬は涸れてしまうのですが、春の長雨が降っても湧き出すのに1か月近くかかります。ちなみに富士山の伏流水は降った雨雪が山麓に湧き出すまで15年位かかっているそうです。



日吉地下壕内の地下水漏出
（竪穴空気坑横）

③ 航空本部地下壕では結露で電気ショートも

日吉の航空本部地下壕に勤務していた秋元智恵子さんが1992年12月15日に手記を書いてくださいました。秋元さんは総務部第一課の理事生でした。これによると、

「壕の中はとても涼しく夏なのに長袖の服を来て居り……その外気との差は欠点も有り、天井に沢山の水滴が出来て電気がショートしたり、電球が切れたりする事も有って、机の上に椅子を乗せ、その上に立って天

井の水滴を拭いたものです。又、木製の洋服ダンスに一晚で十糎（cm）位の長いカビが沢山生えて、朝出勤してびっくりすると同時に鳥肌が立つ程、気味悪く感じました。」とのことでした。

また第3010 設営隊隊長だった伊東三郎氏は「地下海軍省分室と施設系残務整理回想記」で「通風換気を考慮しない隔壁兼用の書類格納ロッカーの林立により、忽ち通風は沈滞し、湿度は高まり、書類は湿気を帯びて来る仕末（ママ）で、湿度改善に関する要求がひっきりなしに舞込んで来た。」（『海軍施設系技術官の記録』）と書いています。

他方、地下水の漏出の多い場所には天井付近から地下水を受ける鉄パイプがモルタルで貼り付けられていて、壁に沿って水を誘導し下の排水溝に落としています。堅穴空気坑の下部付近には、この導水用鉄パイプが多く見られます。

聞き取り

東京大空襲・日吉地下壕体験者 河崎三千夫さんのお話

2024年11月7日 鶴見公会堂 3号会議室にて

参加者：遠藤、喜田、佐藤宗達、小野、中田、川村、鈴木栄、
山田譲、共同通信社・黒木氏

文責 運営委員 山田譲

《空襲体験と徴兵、戦後の生活》

河崎：自己紹介します。大正15年（1926年）11月25日生まれ（もうすぐ）98才、数え年だと99才で白寿です。今の江東区永代1丁目、永代橋のすぐそばに家族と住んでいました。昭和20年3月9日夜から10日の明け方まで、東京大空襲でした。

自分の学校は越中島で、府立第三商業学校で職業学校でした。昭和12年ころ入学で5年制でした。軍人でなければ人でないという時代でした。私は海軍の学校に行きたかったのですが海軍兵学校は視力でダメなので、経理学校でも視力で落とされました。

勤めることにして海軍省の航空本部に入るはずでしたが海軍省の兵備局第4課に入りました。自分の身分は軍属です。課長とか偉い人は全部軍人で局長は少将か中将。課長は大佐か中佐。自分は一番下なのできつかわれました。

そういう中で東京大空襲でした。それまでは空襲警報で避難訓練をしていましたが本格的空襲ははじめてでした。自分は両親と兄弟5人の長男、全部で7人家族でした。3月9日の晩に空襲警報が鳴って、「それっ火を消せ」ということでオヤジと私が家に残りました。他の5人は防空壕に入りましたが、かえって危ないということで避難先に移りました。学校が避難先で近くの学校は臨海小学校でしたが風下になるので、風上の佐賀町に母親は兄弟を連れて逃げました。そこは隅田川の岸で倉庫街です。オヤジと私は箒で火を消そうとしましたが消せません。それで佐賀町に逃げました。何か持っていかなければいけないと思い、ご飯がお鉢に残っていたのでそれだけ持って逃げました。佐賀町で家族みんなと会い、倉庫の陰でご飯を食べました。明け方になりましたがあたり一面焼け跡で、近くに明治小学校があり避難しました。歩くと異臭がしました。死骸の臭いです。防空壕で蒸し焼きになった人が臭うのです。そういうことで明治小学校で家族と一緒にいました。

母親は神奈川県伊勢原の出身で母親の兄2人が農業とか豆腐屋をやっていました。心配して尋ね尋ねて来てくれました。自分の家は跡形もありません。ここにいてもどうしようもなく、また焼け跡に家を建てることは禁止でした。それで家族は伊勢原に避難しました。

数日後に海軍省に行ったら「幽霊が来た」と言われました。その後、（5月25日に）海軍本省も空爆で火災になりました。それで行先は慶應大学の日吉で「防空壕ができ

たから、そこに行って仕事をしなさい」となりました。自分は伊勢原からなので、小田急で町田に行き10分歩いて横浜線に乗り換えて、菊名で乗り換えて日吉に行きました。

昭和20年5月末のことで兵隊に行くまでの2か月のことでした。年齢が数え年の20才だったので本所の焼け跡で3月14日か15日位に徴兵検査を受けました。自分は視力0.2なので第一乙種合格で、「召集まで待っていろ」と言われ、昭和20年8月7日か8日に入隊で、伊勢原で歓呼の声に送られました。本籍は千葉県だったので習志野の兵舎に行きました。

習志野に着いた晩に空襲警報があり、真っ暗な中でご飯を食べました。ご飯はおいしくなくて、米ではなく下痢をするようなものでした。支給された持ち物は、飯盒ではなく竹筒、大小二つ。竹筒の大きい方はご飯、小さい方は味噌汁用。それと背囊（のう）の代わりの袋でした。

翌日に房総半島に移動しました。米軍が房総半島に来るんじゃないかということでした。茂原の近くの青年学校の講堂に寝泊まりしました。海から1里かそこらの所で明日から訓練という矢先の翌日、「全員校庭に集まれ」と言われました。8月15日でした。ラジオを聞かされて天皇の声で何だかよくわかりませんでしたが、戦争が終わったみたいでそれならいいことだとなりました。しかし、すぐには帰れず8月31日に帰宅しました。それまではやることがないので、海岸に行って地引網の漁を手伝って魚をもらいました。

その後は海軍省にはもう仕事がないのでやめることにして手続きをしました。家に帰りましたが今考えると海軍に戻って他の役所に移ればよかったのかもしれない。労働省や郵政省に移った人もいました。自分は一番若くて知り合いが誰もいないし、誰とも連絡が取れませんでした。

伊勢原に帰ってしばらくブラブラしていました。オヤジは豆腐屋の手伝いをしていました。元々は深川で漁船の焼玉エンジンの部品を作って販売する仕事をしていました。オヤジは千葉県勝山の保田の出身で自分の本籍もそこでした。（そのツテがあって）鶴見駅東口の北沢漁機のプロペラ（スクリュ）工場の社長を知っていて「ここがいいだろう」となりました。鶴見区の寺尾に社宅があり、その会社を辞める時に社宅を出て、数10m離れた所が今住んでいる寺谷2丁目の家です。オヤジはエンジンの部品を作って販売する仕事を中央区月島で始めて私も手伝いました。しかし漁船のエンジンは焼玉からジーゼルに変わって部品も変わり商売の見込みがありません。それで新聞の募集広告を見て私は学習研究社に勤めました。60才の定年まで働いてその後は10年位、関係会社の仕事をして、そのあとは今日までの人生です。妻は10年位前に亡

くなって一人住まいですが、息子が2人いて2世帯住宅で長男夫婦がいます。孫はもう家を出ています。次男は狛江に住んでいます。

《海軍省兵備局第4課での勤務》

山田：兵備局にはいつから勤めましたか。

河崎：昭和18年からで商業学校を出てすぐでした。軍属で普通の役所でいうと雇員です。一番若くて使い走りの事務仕事です。人事局ではなく兵備局です。海軍の中に横須賀、呉、佐世保などに軍需工場があり、その全体の人事管理です。統計業務の補佐で自分は商業学校でソロバン検定2級で朝から晩までソロバンで統計のグラフを作ったりしていました。軍需工場で働いている人に召集令状が来



河崎三千夫さん

ます。その人が兵隊に取られると困る場合があります。その人の履歴書を持って陸軍省に行って「召集令状を出さないでくれ」と折衝するのです。市ヶ谷の陸軍省に書類を持って行きます。自分は責任者ではないが1人で行きました。

山田：海軍省内の配置図がありますが、どこにいましたか？

河崎：2階です。日比谷公園の方で、この図面だと人事局と書いてある所です。人事局というのは記憶にないし無線の鉄塔も記憶にありません。私のいた部屋は普通の事務室です。外部の会社の人もよく来ていて日活の人も来ていました。戦後、4課長の大道大佐は日活に行きました。大道大佐は異動せず、ずっと4課長でした。課長の下は中佐少佐で、その下は大尉とか少尉でその下に事務官がいました。勅任官とか判任官で判任官は係長級でした。（この図をみると）高等官食堂があったんですね。思い出した。私は隣の農林省で食べました。

山田：海軍省の入口では身分証とかを見せるのですか。

河崎：何も見せません。証明書はあったと思いますが出入りは自由でした。私は深川から都電で日比谷公園の方まで行って公園を突っ切って裏門から入りました。交代で宿直があって、ある日空襲警報が鳴ったけど眠くて寝ていたら見つかってビンタを食いました。

《日吉地下壕での勤務》

山田：海軍省が焼けた後、兵備局全体が日吉に行ったんですか。

河崎：よくわかりません。4課の人数も記憶にありません。4課は日吉に行きました。日吉には偉い人が、三笠宮とか来ていました。海軍と陸軍では戦争への考え方が違ったのかな。陸軍は抗戦、抗戦でともかく戦うですが、海軍はこの戦争は勝てないと思ったんじゃないですか。日吉に移ってから私たちの課に中尉や少尉が2～3人転がり込んできました。大学を出て幹部候補生になった人たちですが、事務仕事です。本来

は飛行機に乗るはずなのに飛行機がないので「仕方ないからここにいろ」ということでゴロゴロしていました。こういう状況だから日本は完敗です。北支、南支、シンガポール、マニラ、ジャワに行けない。途中で船が空爆でやられる。だから大尉、中尉、少尉が行けない。飯だけは白飯を食べます。

山田：日吉の地図があります。日吉駅、グランド、坂道、イチョウ並木、右と左に校舎、その先が地下壕の入口ですね。

河崎：そうです。毎日通いました。

山田：地下壕の入口を入ると階段になっています。

河崎：階段はおぼえていません。下り坂でそんなに奥までは行きませんでした。通路の高さはこの部屋の高さ（2.5m）位ですね。通路は狭い感じで机を片側にひとつしか置けません。電灯は机の上ではなくて天井じゃないですかねえ。

山田：海軍省は空襲で焼けて軍令部は航空本部の建物に移り航空本部は日吉に来ました。

河崎：それは知りません。日吉の地下壕では左側に机があって右側は通路でした。壁はコンクリートのむき出しだったかどうか、おぼえていません。大道大佐の机はあるんだろうけど通路の奥の方だと思うんですけど。通路の途中で仕事をしていて部屋ではなかったです。



河崎さんが通った人事局地下壕 1C 出入口

山田：測量図で見ると入口から狭い所の先に幅の広い所があります。机が置ける所ですね。日吉駅から坂をのぼって右と左に校舎があつて、その先を下りますと地下壕の入口です。

河崎：（校舎の先の斜面の）階段を下りて地下壕の入口に行きました。他の出入り口には行ったことがなく、ここしか行っていません。人事局は前から日吉にいたのですか。

山田：たぶんそうだと思います。海軍省の空襲の前に人事書類を送つてあつたので書類が無事だったという話がありました。

河崎：（入口の）先の方に田んぼとか畑とか見えました。外に出てもキャッチボールとかやる場所はなかったですね。

黒木：地下壕の中ではどんな仕事をしていましたか。

河崎：人事の仕事で各軍需工場の人員を把握して、その人数の出入りの統計表が多かったですね。「この人はこの工場にとって大事な人だから召集をしないほしい」とやっていました。しかし日吉ではあまりそういうことをやれる状況ではありませんでした。海軍省では企業の人が廊下をウロウロしていました。日吉ではそういうことをやれる体制ではなかったので外部の人は入って来られません。終戦が近くてどうでもいいやとか、成り行きまかせが多かったですね。

山田：日吉での警備はどうでしたか。日吉の駅から学内へは自由に入れたのですか。

河崎：特に誰もいません。地下壕の入口も誰もいません。門番がいるわけでもないし出入り自由で、さっき言ったモタモタして別に職のない人がブラブラしているだけでした。

黒木：もう戦争は負けという雰囲気だったんですか。

河崎：どうですかね。私はそうでした。

黒木：食事はどこで食べましたか。

河崎：地下壕の外の将校の食堂で食べました。地下壕の中では食べられません。外に上がって、ここら辺（地図を指して）に将校の食堂がありました。

山田：第二校舎の裏にそういう所があつたみたいです。地下壕の中で書類を書くのは鉛筆ですか、インクのペンですか。湿気で紙がぬれちゃうますよね。航空本部地下壕ではインクが滲んでたいへんだったと聞きました。

河崎：紙が濡れることはありませんでした。鉛筆が多かったと思います。湿気は感じませんでした。しかし外の空気を吸いたいというのはありました。明るさはそんなに明るいわけではないけど気にするほどではなかったですね。明かりは電球でしょうね。蛍光灯なんかなかったです。夏場にかけて（日吉に）いましたが、中が涼しいということはありませんでした。

山田：（戦後の人事局壕内の写真を見せて）階段が写っていて、先の方はわりと広い所で水がたまっています。当時は床が濡れているということはありませんでした。

河崎：ええ。仕事にはさしさわりなかったです。

《陸軍入隊後のこと》

遠藤：陸軍に入隊したころ原爆のことは聞きましたか。

河崎：8月の6日、9日ですか。そういう原爆の情報はすぐには来ません。広島とか長崎で大変なことがあつたと聞きましたが具体的な話はわかりませんでした。後から聞かされて原爆だとわかりました。

山田：茂原で河崎さんがいた場所を聞きたいのですが。本納と聞いていますが。（注：外房線茂原駅から北へ2駅目が本納駅。東に8km行くと九十九里浜の白子海岸）

河崎：そうそう、本納。鉄道ではなく夜中に歩いて来ました。茂原の駅には行っていません。茂原の青年学校は町の青年学校でした。海岸にも行きましたがどこの海岸だ

ったか、わかりません。歩いて1時間か1時間半でした。漁師さんの地引網を手伝いました。漁師さんも兵隊に取られて男は年寄りしかいませんでした。

山田：陸軍では軍服は支給されましたか。

河崎：軍服は支給されたけど短剣もなく軍靴は牛革でなく豚皮でした。靴下位はありました。

山田：海軍省の軍属の時の服はどうでしたか。

河崎：普通の背広とかの服で軍服ではありません。支給はされません。

黒木：茂原では兵隊は何人いましたか。

河崎：わからないですね。だいたいは千葉県の人だったけど北海道の人も前から来ていました。その人たちが終戦で、今まで威張っていた人たちを裏に連れて行ってビンタを食らわしました。それが北海道の連中で気が荒くて軍曹や伍長を殴ったんです。

《今、戦争について思うこと》

黒木：戦争が終わってどう思いましたか。

河崎：これで帰れる、それまで辛かったのが、とにかく帰れるんだなと思いました。

黒木：戦争について今どう思いますか。

河崎：戦争はつらいし、もったいないし、人が人を殺す。殺し合う。非常にムダなことです。人間としてやるのが他にあります。殺し合いをするくらいなら人間として生きる道として、どういう風に生きるか働くかを考えないといけません。だから戦争はつまらない。

山田：戦争の話は家族にも話していますか。

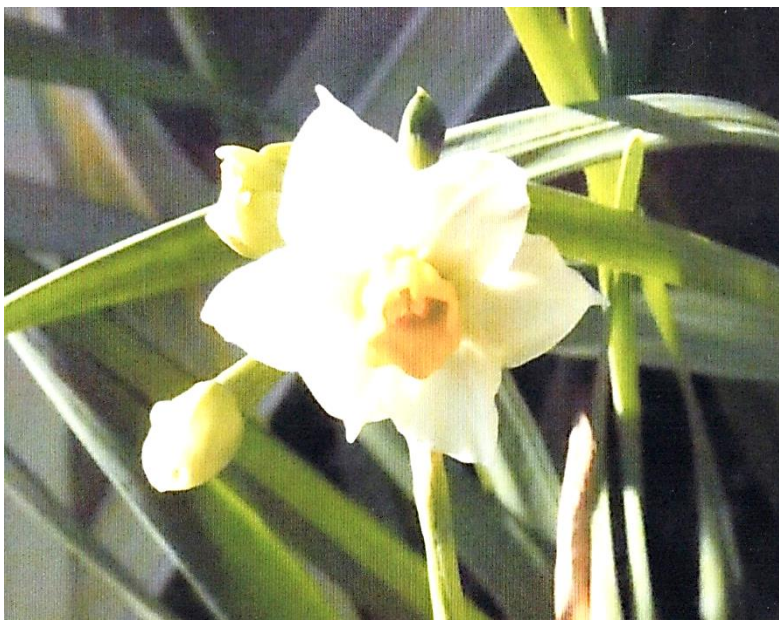
河崎：家族には話していません。話してもつまらない話です。8月の講演会（戦争体験を語り継ぐ会・主催）の時は息子も来ていて、「こんな話、初めて聞いた」と言っていました。

山田：人事局地下壕にいた人の話は私達にとって初めてで、とても貴重なお話でした。

河崎：こういう話はあの時どうだったという話をできる人が今ではいないですしね。

黒木：いつごろから戦争はつまらないと思うようになったのですか。

河崎：ずっと思っていました。結局殺し合いですから。もっと建設的なことがあるだろう、楽しくなるような、給料が上がるような。戦争になると食べ物もまずしくなります。「我慢しなさい」となります。白米を食いたくても食えなくなるということになるでしょう。人の権利を阻害しています。（終了）



スイセンの花

活動の記録 2024年10月～2025年1月

- 10/18(金) 慶應高校社会科見学会 午前 27 人 午後 29 人
 10/21(月) 慶應高校社会科見学会 午前 29 人 午後 29 人
 10/25(金) 来往舎小会議室 会報発送 6 人
 10/26(土) 定例見学会 37 人
 11/4(月) ガイド学習会 日吉地区センター中会議室 13 人
 共同通信黒木記者取材
 11/7(木) 鶴見公会堂会議室 日吉地下壕体験者・河崎三千夫さん
 聞き取り 8 人 共同通信黒木記者取材
 来往舎小会議室 運営委員会 12 人
 11/13(水) 定例見学会 38 人
 11/28(木) 慶應高校長野先生見学会 午前 32 人 午後 37 人
 11/30(土) 定例見学会 40 人
 12/5(木) 来往舎小会議室 運営委員会 11 人
 12/11(水) 定例見学会 41 人 ファカルティにて忘年会 19 人
 12/21(土) 定例見学会 37 人

 1/8(水) 定例見学会 33 人
 1/9(木) 来往舎小会議室 運営委員会 13 人
 1/11(土) 横浜教組平和教育推進委員会見学会 17 人
 1/19(日) ガイド学習会 日吉地区センター別館 2 号室 16 人
 1/21(火) 沖縄県知事公室平和・地域外交推進課視察見学 4 人
 湘南藤沢慶應高校見学会 43 人

連絡先

(見学会) 電話 080-5612-6344
 佐藤 メールアドレス ☎
hiyoshidaichikagou@gmail.com

(会計) 亀岡敦子：〒223-0064
 横浜市港北区下田町 5-20-15
 電話 045-561-2758

(その他) 喜田美登里：〒223-0064
 横浜市港北区下田町 2-1-33
 電話 045-562-0443

ホームページ・アドレス：

<http://hiyoshidai-chikagou.net/>



日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 二千円
 発行 日吉台地下壕保存の会運営委員会 会長 阿久澤武史
 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 加入者名 日吉台地下壕保存の会